ちに分配した。「貧しい人々にはふるまい与え，その善い業は永遠に堪える」（詩 112:9; 2 コリ 9:9）と書かれているように。

最後の晩餐と呼ばれる第五日目に 13 人の貧者を引き受け，季節に合った豊富な食べ物で元気づけ，足を洗い，「涙で濡らし，髪の毛で拭って」（ルカ 7:44），主の命令に従ってすべてを忠実に果たした。晩となり，太陽が沈んだときにも，主の受難を忘れず，目を眠らせ，瞼を休ませることを望まず，我々の主イエス・キリストがこの夜に自らのご意志で罪人らのために受難の実現を急がれたように，彼も自らの意志で悔悛の業の実現のために出かけた。復活と栄光を分かち合えるように，キリストの受難に加えられることを望んだのであった。だから，彼とその仲間は真夜中の静寂の中，彼らの土地，親族，そして父の家から離れた。簡素でありふれた，信心にふさわしい衣服以外はなにも身に着けず，杖と背嚢だけを持って，サン・ギレムへと至る巡礼の旅に出た[14)]。裸足で歩いたが，慣れていなかったため苦労して耐えた。歩く道は裸足で歩く者ばかりでなく，靴を履く者や馬に乗る者，さらに日中旅行する者にとっても困難であった。曲がりくねり，丘で上り，谷で下り，石の破片ででこぼこしたまったく恐ろしい道だからである。歩きながら話し合い，悔悛の業を実現するために互いに励まし合った。どのような神の裁きにより彼らに悲しく，恐ろしいことが起こったのか知らないが，神のご意思は彼らが誘惑されること，誘惑されることで試され，脅されることで浄められることにあると私は思う（ヨブ 41:1–6 参照）。突然，激しい風が砂漠地方から襲いかかり，天を揺り動かし，大気を乱した。その時，それまで輝いていた月が突然，姿を隠し，星の群れもみな一斉に消えた。しかし，また厚い雲が山々を隠し，暗闇が覆った。その時，雷鳴がとどろき，稲光がきらめき，雹が降り始めた。彼らは嵐の激しさへの恐怖と不安に襲われた。最後に，稲光が何度もきらめく中，嵐と雨からの安全と避難所を提供してくれる人の住む場所を探索した。しかし，そこに至るまでに多くの苦難を味わったので，彼らは石で打たれ，の

こぎりで引かれ，試みを受けた（ヘブ 11: 37 参照）と言ってよいだろう。

朝が来ると，神がご覧になる中を喜んで出かけたが，神への愛のために苦難に耐えるのにふさわしい者だとみなされたからである。ついにサン・ギレムに到着すると，そこで騎士や他の人々の群れに遭遇したが，彼らは毎年この日十字架を崇敬するために集まっていた。こうした人々とともに創造主が犠牲を捧げ，我々の行いを償った生命の木を敬虔な心で崇敬した。すべての者が等しく彼らの謙虚さと敬虔さに賛嘆し，ロデーヴ出身であることがわかるといっそう敬意を持った。その中に有力で富裕な男，ガンジュのレイモン・ピエールがいたが，荘厳な祝日の栄誉のためにガンジュで主の復活の日を自分と一緒に過ごすように何度も嘆願し，強いた。彼らは同意し，この者とともに出発し，そこで金曜の備えの日の次の日と主の復活の日を過ごした。そこで至聖なる荘厳なミサを聞き，主の身体と血の聖体を拝領した。

次の日，すなわち復活祭の二日目に主人に別れを告げ，サンティアゴへの旅に出た。ちょうどこの日に主が巡礼服を着てエマオに行く二人の弟子のところに出現したと書かれており（ルカ 24:13-28 参照），彼らは巡礼服を着ている主を求め，あらゆる方法で見つけたいと願っていた。この旅でどれだけの労苦とどれだけの十字架に耐えたのか，「苦労し，骨折って，眠らずに過ごし，食べずにおり，飢え渇き，寒さに凍え，裸でいた」（2 コリ 11:27）ことを知っているのはこの労苦に報われ，証人となられる主だけであった。しかし，神は彼らが真に敬虔で有徳であることを顔を見ただけで簡単に理解できるように，皆が見ている前で恩寵を与えられた。食料が必要なところではどこでも，多くの者が彼らに進んで提供した。もし富裕な者が多くを提供するならば，彼らの一日の食料に十分なだけのものを受け取り，残りは返却した。受け取ることを強いられたときには，その場で貧者たちに分配した。神にすべての希望を置き，金に希望を置くことがないように将来のためになにも持たず，「明日のことまで思い悩むな」（マ

タイ 6:34），そして「なによりもまず，神の国と神の義を求めなさい，そうすれば，これらのものはみな加えて与えられる」（マタイ 6:33）と言われる主を信じた。それゆえ，食料の助けなしで何日も過ごしたが，それでも同じように神に感謝した。この旅のあらゆる地点で聖人の特別な場所を訪れ，いたるところで敬虔な人々を求め，祈祷の援助を要請し，この後，常に罪を犯さず，主に仕えられる生き方を学ぶように最大限に心がけた。彼らに助言した者の間にはひとつの見解があったが，すべての者がひとつの精神によって教えられているのだから，それは同じ意図，同じ言葉，同じ助言であった。すなわち，荒れ野に住み，手の労働で食料を手に入れ，そこに修道院を建設するように，そこで簡素で純粋な生活のうちに神に奉仕し，修道生活の後継者を残すようにと口をそろえてみなが言い，推奨した。サンティアゴ大司教はこの助言に大いに力を与え，彼らを励ました[15]。実際，はじめは自分の司教区に留め，ふさわしい場所を彼らに提供しようと望んだが，その後，別の言語を話す人々の中に留まっても，ほとんど益するところがないだろう，話しても理解されないので（彼らにとっての）外国人に外国人だと思われるだろうと心の中で思い，彼らを知っている土地へ送り返そうと努めた。聖なる計画をやり遂げるように忠告し，神の善良さを期待して，神からの大いなるものを彼らに約束した。

彼の言葉に力づけられ，祝福に励まされ，別の道を通って自らの故郷へと帰った。海の危険にさらされる山の上の大天使ミカエルの墳墓に行き，トゥールの聖マルタンの教会を訪れ，聖マルシャルのためにリモージュを通り，聖レオナールのバシリカに入り[16]，最後の都市のロデズに入った。聖処女，聖母マリア教会で祈っているときに司教に報告され，呼び出されたが，今は亡き敬虔な威厳のあるロデズ司教アデマールであった[17]。彼らがロデーヴの出身者で，また近隣の寛大な貴族として知られていることを知ると，すぐに非常な敬意をもって受け入れた。彼らの願いを知ると，どんなことでも彼らのためになり，もし自分の司教区に留まりたいならば，

助言と援助を提供すると約束した。さらに，ロデズ伯がレラスのポンスが司教区にいると聞いたとき，あたかも知り合いの親しい騎士でかつて友人であったかのように彼に会いたいと思った[18]。彼の望みを知ると，どんなことでも常に援助と保護を与えることを約束した。伯と司教は修道院を建設する用地，つまり集落と放棄された教会を彼らに提供した。しかし，彼らは人混みから逃げているのでむしろ森や林の隠れた場所を望んだ。

彼らは伯の恩恵と司教の祝福を受けて退き，カマレと呼ばれる土地にやって来た。その土地は木が多く，森に覆われ，山は険しく，丘は傾斜し，泉や小川や川で灌漑されている。ある卓越した有力な貴族がここを支配していたが，ル・ポンのアルノーという名であった。ところで彼らはだいぶ以前から彼のことを知っており，この人物が寛大で陽気であらゆる徳行を進んで行うことを知っていた。この者は自分の方に来るのを見て，「我が主たちよ，どうして私の方へ来るのか。なにを望んでいるのか。あなた方が望むものはなんでも用意できることをお知りください」と誰なのか分かる前に言った。彼らを認識すると，大いなる栄誉と献身をもって受け入れ，来た理由を入念に尋ねた。これに答えて，人里離れ，人目につかない信心にふさわしい，そこに留まり，神に仕えられるような場所を探していると申し述べた。「誰が私のようにあなた方の希望を叶えることができ，どの土地がこうした企てにもっと適しているとわかるだろうか。ご覧なさい，あなた方の前に土地はある。あなた方の気に入るところならどこにでも住み，建て，蒔き，植え，ぶどう畑をつくり，私のために祈ってください」と彼は言った。彼らはかつてシルヴァネスと呼ばれた場所を自分たちのために選んだ。彼らやその後継者はｉをａに変えてここをサルヴァネスと呼んだが，かつて森のためにシルヴァネスと呼ばれたものが，今後は救済のためにサルヴァネスと呼ばれることになった[19]。そこで彼らは自らの手で小屋をつくり，動物と一緒に暮らした。日々労働に専念し，薮を鎌で刈り，土地を鍬で耕し，人の住めない場所を人の住む場所に変えた。

それから，彼らの信心の名声はいたるところに広まり，近隣の司教，すなわちロデズ，ロデーヴ，ベジエの司教の耳に，そこからすべての人の耳に届いた。それで，多くの人が彼らのもとを訪れ始め，贈り物を提供し，どんなことでも助けたのであった。以下でロデーヴの人々が多くのことをなしたことが知られていることを十分に示すつもりである。

この時，例のない飢饉がこの地域で起こった。土地が耕作者にその果実を拒み，土地を耕す者はみな悲しみに暮れたのである。彼らは希望を裏切られ，くじかれたので，ケレースを信じてオークの木のもとへ行った[20)]。この年はイザヤの預言のように，1ホメルの種からかろうじて1エファしか収穫できず，10ツェメドのぶどう畑でかろうじて1バトしか満たせなかった（イザ5:10参照）と言われる。こうしてサルヴァネスに貧者の群れが集まり，この大群集は，あたかも軍勢のように家を取り囲み，その食料に生命のあらゆる望みをかけたのであった。ところで最初からこの家とその兄弟らの間では，すべての者を宿に受け入れ，困窮している者に食事を与え，貧者を元気づけ，裸の者に服を着せ，死者を埋葬し，この他の敬虔と慈悲の業を果たすという慣習が根付き，ほとんど法のようなものとみなされていた。この慣習は神の保護の下でこの場所が可能な限り現在まで続いているのが見られる。しかし，兄弟たちはこれほど多くの混乱し，打ちひしがれた貧者の群れを見て，互いに言い合った。「この場所から逃げ出すか，彼らとともに死ぬかのどちらかだ。なにをなすべきか考えよ。誰が数日でも彼らを養えるだろうか。建物と居住者が存在するこの場所がたとえパンでできていたとしても，これだけの大群衆では短期間で食べ尽くされてしまうだろう」。

その時，レラスのポンスは，不平の声を制して言った。

「たとえ逃げたくとも，逃げてはならない。神が裁き手なのだから，逃げる道は東からも西からも荒れ野の山からも開けていないのだ。結局，逃亡を急ぐ者は自らが敗者であることを示すことになるだろう。敗者には不

名誉が，勝者には名誉が待ち構えている。我々は逃げるためではなく，戦うために来たのだ。だから，立ち止まり，逃げず，勇敢に戦うべきだ。『規則に従って戦わなければ，栄冠を受けることはできない』（2 テモ 2:5）のだから。あなた方は労苦と忍耐の戦いをなしとげた回心した当初の日々のことを，そしていかに主があなた方をあらゆる不安や困難から解放なされたのかを覚えているだろう。今回も主が同じように助けてくださることを信じなさい。かつて神が砂漠のイスラエルの民を，40 年間，地上のパンではなく天上のマナで養われたことを思い起こしなさい（出 16:1–36 参照）。エリヤの時代には，シドンのサレプタで壺の粉が尽きることがなく，瓶の油がなくならないようにして（王上 17:9–16 参照）預言者とともに寡婦とその家にいる者らを何日も壺の粉と瓶の油で養われた。エリシャの時代にも，サマリアが攻囲され，攻囲された者らが飢饉の困難にさらされていたときに，ある日，神は『サマリアの城門で上等の小麦粉 1 セアが 1 シェケル，大麦 2 セアが 1 シェケルで売られる』（王下 7:1）ほど豊富な食料を与えられた。 福音書でも，主が 5000 人を五つのパンで満腹にされたことや，食事をした後に食べた人々が残したパンの屑を使徒らが 12 の籠に取り除いたことを聞いただろう（マルコ 6:38–44; マタイ 14:13–21; ヨハネ 6:10–13 参照）。今やこうしたことができないほど『主の手が短いというのだろうか』（民 11:23）。今もかつてと同じくらいであり，より短いこともより長いこともあり得ない。主を信じよう，兄弟たちよ，『信じる者にはなんでもできる』（マルコ 9:23）のだから。我々のすべての希望を主に置こう，自らに望みをかけるすべての者を解放されるのだから。主を畏れよう，『主を畏れる人々の望みをかなえ』（詩 145:19）られることを知って。主を愛そう，『主を愛する人は主に守られ』（詩 145:20）るのだから。しかし，兄弟たちよ，今，時が求めているのは，あなた方がかつて行った覚えがあることを再び行うことだ。持つものを売り，施しをしなさい。かつては自分のものだったが，今は共同体のものだ。見なさい，あなた方は牛

と羊，役畜と家畜を所有している。糸の切れ端から靴ひもまで困窮する兄弟たちに売られないもの，贈与されないものがなにも残らないようにしよう。彼らも我々の兄弟なのだから。我々と同じ父なる神を持ち，みなが『我らの父』と言うのだ。彼らは我々と同じ対価で，つまりイエス・キリストの血で贖われたのだ。もし，これらすべての後に死んだとしても，『我々は全員潔く死のう』（1マカ 2:37）。キリストが我々のために命を捨てたように，我々は兄弟たちのために命を捨てなければならないことを知っているのだから。その間に，私はこの世の人々を治める方々のもとへ行き，物乞いたちのための物乞いとなろう」。

こう言うと，小さなロバに乗り，鞭を手に出発した。兄弟らは彼が命じたように所有していたすべてを売る用意をした。これを聞き，ル・ポンの領主のアルノーはこの土地が再び孤独の地になってしまうことを恐れ，そうならないように手を尽くした。彼は倉庫を開け，短期間，貧者を養うために彼らに食料を与えた。この時，主は彼らの信仰をご覧になり，この日からこの家に祝福を与えられた。わずかな穀物が製粉機でひかれたときには，壺は集められた穀粉でいっぱいになり，こね粉がつくられたときには，神の祝福のイーストでこね鉢が溢れたからである。かまどは小さな形でパンを受け入れ，大きな形にして返した。同じパンが細かくちぎられたときには，わずかな数で大きな籠がいっぱいになり，施された人々により空になることはほぼなかった。パンは分配の際にいっそう増殖し，食べる人の口の中の歯の下で大きくなった。こうして神の祝福の恩寵が溢れ，この荒れ野にいる人々はまるで天上のマナのように新しい収穫の季節までずっと食べさせられた。

レラスのポンスは数日後に戻り，かなりの量の神の祝福の慰めを持ち帰り，家とそのすべての住民を喜ばせた。神がどれほどの驚異をなされたのかを聞き，喜びに溢れた。彼とともにみなが賛歌と頌歌で主を祝福した。「主は驚くべき御業を記念するように定められた。主は恵み深く憐れみに富み，

主を畏れる人に糧を与え」られた（詩 111:4-5）。洗礼者聖ヨハネの生誕の祝日まで時が過ぎ，この日，ポンスはすべての人に食事を用意し，全員が十分に食べさせられると，別れを告げ，主の御名において自らの場所に行くようみなに命じた。ここを発つと，彼らはいたるところで「主がこの場所におられ」（創 28:16），「これはまさしく神の家である」（創 28:17）と説いて回った。

しばらくすると，ついにこの場所は繁栄し，物だけではなく敬虔な人物や財産の点で大いに成長したので修道院を建設し，修道生活を保つのがふさわしいと言われた。それゆえ，どの生活様式がよいのかで彼らの間で論争が起こった。シトーの生活様式を賞賛する者もあれば，シャルトルーズの生活様式を賞賛する者もあり，さらに修道女のための修道院を建設すべきだと述べる者もあった。それでシャルトルーズの人々の判断にこの問題を委ねることに決められた。このためにレラスのポンスはグランド・シャルトルーズへ行き，院長と他の兄弟らに問題を説明した[21)]。彼らは真の戒律を調べ，他のすべての生活様式に比してシトーの生活様式を称賛し，むしろこちらを追求するようにポンスに命じた。さらに，この助言に付け加えて，行き来するのにあまり苦労しないように，彼らの生活様式はこの場所にもっと近隣のこの会の修道院から受け入れるようにと述べた。

それで，レラスのポンスは彼らに別れを告げ，マザンに行き，集会室に入り[22)]，当時，この修道院を治めていた院長ピエールの手を通じてサルヴァネスの家をシトー会に譲り渡し，この院長に前述の家の管理を委ねた。その後，今は亡き敬虔で聖なる，神にふさわしい人物であるマザン修道院の初代院長ピエールが，仕事場を準備して，この場所を修道生活のために調整するように何人かの選ばれた者をこの場所に送った。サルヴァネスの兄弟らに彼のもとに来るように命じ，聖ベネディクトゥスの戒律に従って一年間の試練を受け，教育された後に，修道服を着せ，祝福し，送り返した。学識があり，賢明で善良な人物，すなわちアデマールを彼らの上に置